

鈴木信太郎記念館だより

第7号

区制90周年企画展特集①

区制90周年 鈴木信太郎記念館企画展 「鈴木家の暮らし×としま90年」

フランス文学者・鈴木信太郎(1895-1970)が暮らしていた住まい、「旧鈴木家住宅」(豊島区指定有形文化財)を改修・整備し、2018(平成30)年に開館した鈴木信太郎記念館。3つの時代・様式の建物からなるこの家の歴史は、豊島区90年のそれとほぼ重なります。

1928(昭和3)年竣工の書齋棟は、1932(同7)年に誕生した豊島区とほぼ同世代。当時個人宅では珍しかった鉄筋コンクリート造で、1945(同20)年の城北大空襲を耐え抜き、多くの貴重書を守りました。終戦直後の物資の乏しい時代には、焼失した母屋の跡地に茶の間・ホール棟(1946[同21]年)が建てられ、さらに2年後には現在の春日部市にあった鈴木本家から書院造の座敷棟が移築(1948[同23]年/明治20年代建築)されました。

本展では書齋および茶の間に、この家で実際に使われていた家具や調度品等を展示して鈴木家の人々の昭和の暮らしを再現します。また、座敷棟では、信太郎の長男で建築学者・建築家の成文(1927-2010)が、晩年にスケッチとともに綴った「文文日記」(2002[平成14]年4月~2010[同22]年3月、Web公開後書籍化[全8巻])をもとに「としまカルタ」を作り、来館者の皆さんにもご参加いただき完成させる参加型展示「みんなでつくろう!《としまカルタ》」を行います。

あなたも鈴木家の人々と一緒に、豊島区90年の歴史に思いを馳せてみませんか。

(永嶋 里佳)

[会 期] 2022年10月1日(土)~2023年3月26日(日)

[会 場] 当館書齋棟、茶の間・ホール棟、座敷棟



図2 鈴木家旧蔵のカルタ柄文台

東京大塚阿波おどり

阿波おどりは、豊後国阿波(現在の広島県阿波)を本拠地とする伝統的な舞踊で、2019(平成31)年にユネスコ無形文化遺産に登録された。阿波おどりの歴史や文化を伝えるために、本館では阿波おどりの魅力を伝える展示を開催する。

「文文日記」
2002年(平成14)年4月~2010年(平成22)年3月

おおつか
あわおどり

図3 成文の日記をもとにした「としまカルタ」



図1 信太郎の暮らしした時代そのままの書齋

鈴木信太郎の書齋 —「思出の寶物」に囲まれて—

分厚い鉄の扉をくぐるとそこには別世界が広がっています。壁一面を囲むチーク材の書棚、棚を埋め尽くす古い書物…。スタンドグラスから入る琥珀色の光に満たされ、聞こえてくるのは、時計の振り子の音だけです。

ここは、鈴木信太郎が最も親しみ、愛した場所です。フランス留学時に蒐集した稀観本^{きこうほん}1,000余冊を船便の火災で失うという苦い経験の後、二度と同じ思いはしないという決意のもとに1928（昭和3）年に建設されました。この書齋は、信太郎が1970（同45）年に机の前に座したまま亡くなるまで半世紀近くにわたり、彼の学究生活の拠点となりました。

「世界は一冊の美しき書に終る」（LE MONDE EST FAIT POUR ABOUTIR A UN BEAU LIVRE）。信太郎がスタンドグラスに刻んだ敬愛する詩人マラルメの句です。「その象徴的な一巻の奥義の書の構成の樞機に馳せ参じるために、日夜心を磨かうと、この言葉を彫りつけたのだ」といいます。こうして書齋の机に向かい、研究や読書に没頭していた信太郎。彼はその脇の「机に坐つた時に丁度眼の落ちるあたりの棚」に「思出の寶物」を並べ、「時折、仕事に疲れた眼を舉げて[…]なつかしくそれらを眺め」たといえます。

これら、「七十年を越す一生の随所に強い印象を残した忘れられない親友や師匠の、私[信太郎]にとつただけの寶物」とはどのようなものでしょう。まずは信太郎や辰野隆^{ゆたか}（1888-1964）とともに戦前に東大の仏文学科を盛り立てた豊島與志雄^{とよしまよしお}（1890-1955）と山田珠樹^{たまき}（1893-1943）の写真です。どちらも「稀有な酒好き」で、信太郎は夜中に寝酒としてウイスキーを嗜みながら、彼らに杯を差し出すこともあったといえます。その上の棚に掛けられた翁の能面は、地震学者で東大の地震研究所の第2代所長を務めながら、若くして亡くなった石本巳四雄^{みしお}（1893-1940）の形見の品です。信太郎は中学一年の時に同じ学校に通う二歳上の彼と梅若能楽堂で出逢い、大学時代まで共に謡や仕舞の稽古に励みました。



図1 石本巳四雄遺愛の能面

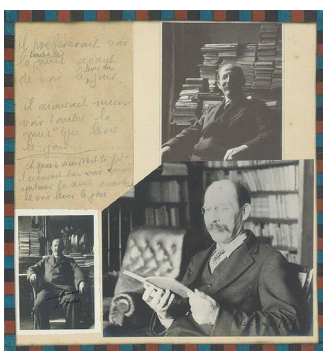


図2 恩師リュシアン・フーレーの写真と自筆メモ

さらに、フランス留学時（1925～1926年）の中世フランス語の個人教授として、「本當に手を執つて教へてくれた師匠」と信太郎が仰ぐリュシアン・フーレー（1873-1958）の写真と手紙。同じく留学時に出逢った老舗古書店主で名高い愛書家、信太郎に「書籍の如何なるものか、原稿や初版の如何に大切なものかを教へてくれた恩人」エドゥアル・シャンピオンの手紙も棚を飾っていました。

なかには、「主観的のみではない本當の寶物」もありました。世界的に著名な文学研究者で外科医のアンリ・モンドールから贈られた、マラルメ自筆の四行詩のカードです*。

書齋内にはその他、「活字に疲れた眼を休めるのに」、ところどころに絵画も飾られていました。高島達四郎^{たかぼたけたつしろう}作の《プチ・ジャンの肖像》（1928年頃）や須田国太郎作《鷲図》（制作年不詳）など、信太郎と親交のあった画家たちの作品です。本展では通常は複製を展示している二作品のオリジナルのほか、中山巍^{たかし}作《顔》や、前述したモンドールが手がけたエッチング《猫》を併せてご紹介します。（永嶋 里佳）

* マラルメ自筆の四行詩のカードは、現在同時開催中の「生誕180年記念『ステファヌ・マラルメ詩集』」にて展示（2023年3月迄）。本資料については、拙稿「鈴木信太郎とアンリ・モンドール：ふたりの戦争、ふたりのマラルメ」（「鈴木信太郎記念館だより」第6号、2022年3月）を参照。

【参考文献】鈴木信太郎「書齋の話」、「繪玻璃の窓」、「本箱の中の秘密」、「私の本棚」、いずれも『鈴木信太郎全集』第5巻所収、大修館書店、1973年/鈴木道彦『フランス文学者の誕生 マラルメへの旅』、筑摩書房、2014年

鈴木家の茶の間

— 日常の暮らし —

1946(昭和21)年に建設された「茶の間・ホール棟」は、豊島区内に現存する戦後復興期の住まいとして貴重な建造物になります。城北空襲による罹災後、焼失を免れた書斎棟で暮らす一家の生活空間を確保するため、必要最小限となる15坪(約50㎡)で増築されました。現在も76年前の竣工当初の姿を残しています。南側には玄関を設け、応接間/ホール、そして六畳間の茶の間と続きます。さらに隣接する書斎棟の2階へ上がるための階段室、北側には台所や浴室、便所などの水回りが備えられました。

今回は、主に鈴木家の食事の場、家族団らんの場あるいはくつろぎの場として使用された「茶の間」での住まい方に注目し、鈴木家の暮らしの一端をご紹介します。

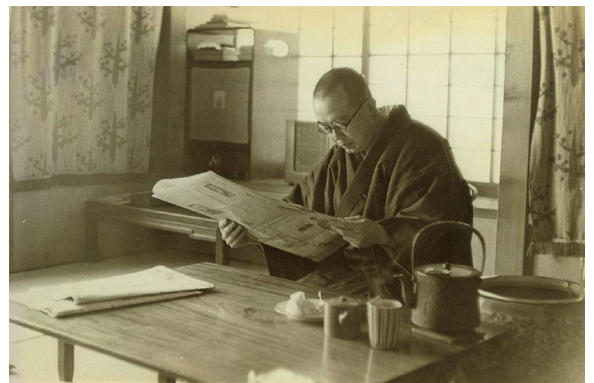
食卓について、寢床では見なかった他の三種類の新聞に目をとおしながら、ゆるゆると朝めし。朝めしは今朝は水みつ桃二個。昨朝はバナナ二本。冬にはリンゴ一個。他には、中の上ぐらいの煎茶をおいしくいれて約一合飲む。それ以外は何もとらない。めしも味噌汁も香の物も、夕めしの時までは食はない。かういふやり方を始めてから、もう十年になる。朝めしが終わると九時ごろになりただちに仕事机の前にすわる。

起床後に「茶の間」で朝食をとる信太郎のモーニング・ルーティン(日常的な朝支度)の様子が語られています。文中の“食卓”とは、六畳間の中心におかれた「掘りごたつ」を指します。(当館では、この「掘りごたつ」に実際に腰掛けていただくことができます。)上座にあたる位置が信太郎の定席であつたらしく、食卓で新聞を読みながら旬の果物とお茶で“ゆるゆる”と朝のひとときを過ごして仕事場である書斎に向かう姿が浮かびます。他方で、一日の終わりに立ち寄る場所もまた「茶の間」であつたことを次のように述べています。

人生が楽しいならば、眠ってしまつては何もならぬ。睡眠を極度に追放して、意識のある時間をできるだけ延長しなければならぬ。これは私の周囲では、家内も子供らも皆同意見らしく、毎日深夜まで何かやつてゐて、家中が茶の間に集まるのは、夜中の十二時である。

寝る間を惜しみ各自の時間に没頭する住人たちの一息つく場が「茶の間」であつた様子を伝えています。

さて、今回は「私」の空間である「茶の間」をご紹介します。令和4年10月から開催する区制90周年企画展「鈴木家の暮らし×としま90年」では、この「茶の間」にも実際に使用された調度品などを用いて再現展示を行います。建造物の内部を見学しながら、信太郎が過ごした空間で当時の暮らしを振り返ってみてはいかがでしょうか。



茶の間でくつろぐ信太郎

(森 泰子)

【参考文献】鈴木信太郎「朝めしまで」、「読書法」/『鈴木信太郎全集』第5巻、大修館書店、1973年

記念館からのお知らせ

南大塚地域文化創造館文化カレッジ

「フランス文学とフランス文化に親しむ II」

2019年に開催、大好評を博した「フランス文学とフランス文化に親しむ」(学習院大学文学部フランス語圏文化学科および当館共同企画)が帰って来ます。今回講座をご担当いただくのは、立教大学文学部文学科フランス文学専修ほかに所属の先生方で、文学をはじめ、さまざまな視点からフランス文化の多様性についてお話いただきます。

[日 時] 2022年10月29日、11月5日、12日、19日、26日(全5回) / 毎週土曜 / 14:00~15:30

[会 場] 南大塚地域文化創造館、鈴木信太郎記念館(11月12日のみ)

[講師及び内容] ①澤田直氏(立教大学教授)「フランス文学の多様性」 ②小倉和子氏(立教大学教授)「フランス語圏文学:カナダを中心に」 ③鈴木信太郎記念館学芸担当「フランス文学者鈴木信太郎の生涯と鈴木信太郎記念館」 ④関未玲氏(立教大学准教授)「マルグリット・デュラス:映画作品と文学作品」 ⑤坂本浩也氏(立教大学教授)「マルセル・ブルーストとその時代:19世紀末から第一次世界大戦まで」

[定 員] 30名 * 豊島区在住・在勤・在学の18歳以上の方を優先する場合があります。

[費 用] 2,800円(教材費含む)

[応募方法] 「広報としま」8月21日号、としま未来文化財団情報誌「Mirai」9月号、同財団または当館ホームページをご参照のうえ、お申し込みください。

[応募締切] 10月5日(水)

[主 催] 公益財団法人としま未来文化財団

* 鈴木信太郎記念館・立教大学文学部文学科フランス文学専修との共同企画です。

ブルースト没後100年特別公開

— 『失われた時を求めて』 関連資料 —

20世紀を代表する作家のひとり、マルセル・ブルースト(1871-1922)。当館では2021年に生誕150年を記念して、作家の代表作『失われた時を求めて』の自筆書き込み校正刷(第三篇『ゲルマントの方』[部分]、1920年頃)*等を特別公開しました。今年も、ブルーストの没後100年の命日にあたる11月18日を含む期間に、本資料をはじめとする関連資料を展示いたします。

[会 期] 2022年10月29日(土)~2023年1月8日(日)

[会 場] 当館書斎棟

* 本資料については、鈴木道彦「アンリー・モンドールの書斎」(「鈴木信太郎記念館だより」第5号、2021年9月)を参照。

鈴木信太郎記念館だより 第7号

発行日 2022年9月9日

発 行 豊島区

編 集 豊島区立鈴木信太郎記念館

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-52-3

TEL: 03-5950-1737

<https://www.city.toshima.lg.jp/129/bunka/bunka/shiryokan/suzuki/suzuki.html>



としま区制90周年

SDGs 未来都市としま



TOSHIMA
International City
of Arts & Culture



豊島区は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。